

〔研究ノート〕

本学における介護実習評価の特徴と課題 —実習施設評価と学生自己評価の比較を通して—

工藤 雄行¹⁾、山口かおる¹⁾

要 旨

本研究では、現在、弘前医療福祉大学短期大学部生活福祉学科介護福祉専攻(以下、本学とする)で使用している実習評価表を用い、実習施設評価と学生自己評価の比較を通して、評価項目ごとにどのような特徴があるのか明らかにすると共に、現行の実習評価見直しへ向けて示唆を得ることを目的とする。結果、評価に関わる6項目における全体の評価の平均は、実習施設評価が75.275に対して、学生自己評価が74.373と低く評価していた。また、双方に共通し、評価が高い項目は利用者の理解、社会関係に関することであった。また、評価が最も低かった項目は介護技術に関することであった。学生の自己評価表に設けた自由記載欄への記述内容や実習指導者からの意見等も踏まえ、本学における実習評価の評価基準の策定と、指導者と学生が相互理解を深めることができるような評価方法の検討、そのための資料として活用できる実習評価表の開発の必要性等、現行の実習評価見直しへ向けての示唆を得た。

キーワード：介護実習、実習施設評価、学生自己評価

I. はじめに

介護実習(以下、実習とする)は、介護福祉士養成課程のカリキュラムにおいて、学内で習得した学習内容を実践の場を通して再確認し、利用者とのふれあいから介護福祉士のあり方について熟慮できる重要な機会である。教育方法の手引¹⁾では実習について「介護の実体験を通して、領域『人間と社会』で学んだ人間の尊厳や、領域『こころとからだのしくみ』で学んだ介護に必要なからだのしくみなどこれまでの学習内容を統合させて、介護とは何かを理解・再確認し、それを実践する基礎的能力を習得する学びの場である」としている。

実習における評価は、学生が実習を振り返る機会となり、自らを客観的に見つめなおす上での指標となる。そして、次の実習へ向けての自己課題を明らかにするための判断材料ともなる。小櫃²⁾は「実習評価の目的は、実習生が実習体験の中で目標に沿って何を学び、結果として何を得られたのかを確認することである。また、実習過程で何に困難を感じ、それを指導者や教員の適切な

助言や指導を受けて、どのように克服し展開できたかを見極めることも重要なポイントとなる」と述べている。評価は実習後の学生が学習を進めて行く上での参考となることはもちろんのことであるが、教員にとっては、実習中の学生の様子や、学内で習得した学習内容が実践の場でどの程度活かすことができたのか把握できる貴重な資料である。実習指導者(以下、指導者とする)にとっても、自らの指導内容がどの程度学生に理解してもらえたのか、その時々状況に応じた指導が学生にできたのかを振り返る機会となる。

弘前医療福祉大学短期大学部生活福祉学科介護福祉専攻(以下、本学とする)では実習終了後、実習施設から提出される実習評価表の内容について学生に開示し、次の実習へ向けての自己課題の再確認に役立ててもらっている。しかし、学生からは実習施設評価(以下、施設評価とする)について自己評価と比較して差があるという意見がある。また指導者からは、実習評価表作成時に各項目について評価する際、基準が明確でないため評価しづらいとの意見もある。

1) 弘前医療福祉大学短期大学部 生活福祉学科 介護福祉専攻 (〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1)

本稿では、現在本学で使用している実習評価表を用い、施設評価と学生自己評価を比較することにより、評価項目ごとにどのような特徴があるのか明らかにする。また今回明らかになった結果をもとに、現行の実習評価見直しへ向けて示唆を得ることを目的とする。

II. 方法

1. 対象者

本学生活福祉学科介護福祉専攻2年次生40名、実習施設24箇所。

2. 実習概要

本学は介護福祉士養成校（以下、養成校）2年課程である。実習時間は450時間であり、その内訳は、1年次前期実習90時間（7、8月）、2年次中期実習180時間（6月）、2年次後期実習180時間（11月）である。実習施設には、介護老人福祉施設、介護老人保健施設、障がい者支援施設があり、合計45施設である。

3. 調査方法

集合調査法による自記式質問紙調査を実施した（2014年7月）。学生に対して、本研究の主旨等について書面を用いて説明し依頼した。調査用紙（学生自己評価表）はその場で配布し、記入してもらい、調査協力への同意の得られた学生の調査用紙のみ回収した。63名中、40名分の調査用紙が提出され、回収率は63.5%であった。実習施設にも本研究の主旨等について書面を用いて説明、依頼し、調査協力への同意の得られた施設の評価表のみ使用することとした（24箇所、全てから同意を得た）。

4. 調査項目

施設評価、学生自己評価共に、本学で実習毎に使用されている実習評価表の評価項目を用いた。具体的な評価項目については以下の通りである（数字の後の文言を大項目、括弧内は小項目とする）。①利用者の理解（利用者との関係づくりができる、個別ニーズが把握できる）②介護技術（利用者の個性及びその人の生活環境に対応した日常生活に関する介護技術を習得している）③記録と計画（実習記録が書ける：実習の振り返りと気づきがある、介護計画が立てられる）④役割とチームケア（介護職員の役割がわかる、自己の役割を自覚して他の職種と協働できる）⑤社会関係（施設と地域とのつながりがわかる、各種プログラムに参加できる）⑥態度（礼儀ができてい、責任感がある、積極性、協調性がある）以上である。①から⑥の各小項目について、A：優

（100～80点）、B：良（79～70点）、C：可（69～60点）、D：不可（59点以下）の4段階の評価をしてもらった。また、学生の調査用紙にのみ、その他の自由記載項目として、実習評価についての要望の欄を設けた。

5. 分析方法

施設評価表と学生自己評価表の記載内容を比較分析した。各評価項目における検定はSPSS17.0ソフトにより行った。なお、実習評価表における各項目の4段階評価（A、B、C、D）については、統計処理しやすいよう研究者間で協議し、数値化し置き換えることとした（A…90点、B…75点、C…65点、D…45点）。また、評価項目の大項目は、それに含まれる小項目から構成されている。実際の評価は、小項目ごとに評価されているが、今回は、大項目の中に含まれる小項目間の平均点を大項目の点数とした。

6. 倫理的配慮

対象学生に対し、本調査の主旨と方法、調査協力の任意性、不利益の有無等について書面を用いて説明し、調査用紙の提出をもって研究への同意が得られたものとした。実習施設にも同様の内容について明記してある書面を送付し同意を得た。

III. 結果及び考察

1. 調査対象学生の属性

調査対象学生の属性を表1に示した。性別は40名中女性が28名で70.0%を占めていた。年齢層は40代が最も多く13名であり、平均年齢は32.0歳であった。

表1 調査対象者の属性

性別	男性	12名	30.0%
	女性	28名	70.0%
年齢	10代	10名	平均年齢 (32.0歳)
	20代	10名	
	30代	6名	
	40代	13名	
	50代以上	1名	

2. 実習評価

(1) 施設評価と学生自己評価について

中期実習における施設評価と学生自己評価を表2に示した。評価の平均は、施設評価が75.275に対して、自己評価は74.373と低く、学生が実習を振り返り謙虚な姿勢で評価した結果か、前回の1年次前期実習から約1年間の期間を経ての2年次中期実習ということもあり、実習

に取り組む上で施設環境に慣れ、実力を発揮するまでに時間がかかったものと考えられる。

施設評価の平均値が最も高かった項目は⑥態度で77.962であった。施設評価の平均75.275を下回った項目は②介護技術、④役割とチームケアの2つであり、②介護技術は71.125と6項目中では最低であった。学生自己評価において、評価の平均値が最も高かった項目は⑥態度で77.258であった。自己評価の平均74.373を下回った項目は②介護技術、③記録と計画の2つであり、②介護技術は70.500と6項目中では最低であった。項目⑥においては $P < 0.05$ で有意差が見られた。

次いで、実習施設と学生の項目別評価割合を表3、4

に示す。施設評価では全項目において「よくできる」、「まあまあできる」を合計し、80%以上の評価が得られたのは6項目中2項目であった（①利用者の理解82.5%、⑤社会関係80.0%）。同様に学生自己評価では、6項目中4項目が80%の評価を得ていた（①利用者の理解87.5%、④役割とチームケア80.0%、⑤社会関係80.0%、⑥態度87.5%）。双方に共通し、「よくできる」、「まあまあできる」を合計し、80%以上の評価が得られたものとしては①利用者の理解、⑤社会関係の2項目であった。評価項目ごとの施設評価と、学生自己評価の割合については以下の通りである。

表2 中期実習における施設評価と学生自己評価

評価項目			施設評価		学生評価		有意確率
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	利用者の理解	(1) 利用者との関係づくりができる	76.813	10.393	75.668	9.129	
		(2) 個別ニーズが把握できる					
2	介護技術	(1) 利用者の個性及びその人の生活環境に対応した日常生活に関する介護技術を習得している	71.125	9.163	70.500	9.727	
3	記録と計画	(1) 実習記録が書ける (実習の振り返りと気づきがある)	75.375	10.780	72.812	9.760	
		(2) 介護計画が立てられる					
4	役割とチームケア	(1) 介護職員の役割がわかる	74.250	10.256	75.375	8.446	
		(2) 自己の役割を自覚して他の職種と協働できる					
5	社会関係	(1) 施設と地域とのつながりがわかる	76.125	10.299	74.625	9.138	
		(2) 各種プログラムに参加できる					
6	態度	(1) 礼儀ができています	77.962	11.096	77.258	7.214	*
		(2) 責任感がある					
		(3) 積極性、協調性がある					
計			451.650	61.987	446.238	53.413	
平均			75.275		74.373		

* $P < 0.05$

表3 各項目別の施設評価の割合

(単位%)

大項目	小項目	よくできる (100~80点)	まあまあできる (79~70点)	あまりできない (69~60点)	できない (59点以下)	合計	
1	利用者の理解	(1) 利用者との関係づくりができる	42.5	40.0	15.0	2.5	100.0
		(2) 個別ニーズが把握できる					
2	介護技術	(1) 利用者の個性及びその人の生活環境に対応した日常生活に関する介護技術を習得している	7.5	52.5	35.0	5.0	100.0
3	記録と計画	(1) 実習記録が書ける (実習の振り返りと気づきがある)	35.0	42.5	15.0	7.5	100.0
		(2) 介護計画が立てられる					
4	役割とチームケア	(1) 介護職員の役割がわかる	32.5	40.0	17.5	10.0	100.0
		(2) 自己の役割を自覚して他の職種と協働できる					
5	社会関係	(1) 施設と地域とのつながりがわかる	37.5	42.5	12.5	7.5	100.0
		(2) 各種プログラムに参加できる					
6	態度	(1) 礼儀ができています	47.5	30.0	15.0	7.5	100.0
		(2) 責任感がある					
		(3) 積極性、協調性がある					

表4 各項目別の学生自己評価の割合

(単位%)

大項目	小項目	よくできる (100~80点)	まあまあできる (79~70点)	あまりできない (69~60点)	できない (59点以下)	合計
1 利用者の理解	(1) 利用者との関係づくりができる	32.5	55.0	10.0	2.5	100.0
	(2) 個別ニーズが把握できる					
2 介護技術	(1) 利用者の個性及びその人の生活環境に対応した日常生活に関する介護技術を習得している	10.0	40.0	45.0	5.0	100.0
3 記録と計画	(1) 実習記録が書ける (実習の振り返りと気づきがある)	27.5	42.5	22.5	7.5	100.0
	(2) 介護計画が立てられる					
4 役割とチームケア	(1) 介護職員の役割がわかる	30.0	50.0	20.0	0.0	100.0
	(2) 自己の役割を自覚して他の職種と協働できる					
5 社会関係	(1) 施設と地域とのつながりがわかる	25.0	55.0	17.5	2.5	100.0
	(2) 各種プログラムに参加できる					
6 態度	(1) 礼儀ができています	40.0	47.5	12.5	0.0	100.0
	(2) 責任感がある					
	(3) 積極性、協調性がある					

①利用者の理解

利用者の理解における評価を図1に示す。この項目は施設、学生共にできると評価した割合が最も高い項目である。「よくできる」、「まあまあできる」を合計した割合を比較すると、施設では82.5%であるのに対し、学生自己評価では87.5%というように施設評価よりも高い。これは、学生が介護は対人サービスであり、何をすることもまず利用者に向き合うことが基本であるということを感じ、実習施設において介護に関わる知識や技術の習得だけにとらわれず、利用者と真摯に関わり、利用者の理解に努めていた結果であると考えられる。また、本学では中期実習の課題として、学生に実習施設において介護サービス計画(ケアプラン)を作成し実施することを課している。そのため実習期間では、多くの時間を担当利用者の個別ニーズ把握のためのアセスメントに費やす。ケアプラン立案の過程においても利用者理解について自分なりに努力してきたという学生の自負心がこの項目の評価に現れているのではないかと推察する。また、実習施設においても利用者との関わりが介護サービスの基盤であるため、重点的に指導されており、利用者との関係づくりを学生ができるよう配慮もされている。その成果が評価に結びついていると考えられる。

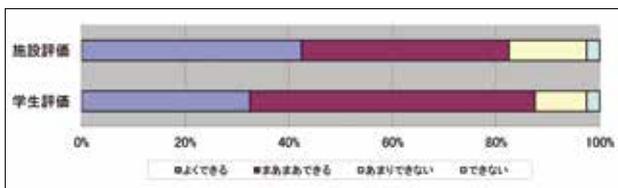


図1 利用者の理解

②介護技術

介護技術における評価を図2に示す。この項目は施設、学生共にできると評価した割合が低い項目である。「よくできる」、「まあまあできる」を合計した割合を比較すると、施設では60.0%であり、学生自己評価では50.0%である。限られた実習期間の中において、利用者の個性及び生活環境に対応した日常生活に関する介護技術を実践することは容易なことではない。学内においては、実践的な介護技術について全体で学ぶ機会はあるものの、時間的な制約もあり個別指導が行き届かない部分があることも事実である。また、様々な症例に応じた介護技術について学ぶというよりも介護技術における基礎の習得に重点をおいている。そのため実習施設において目にする介護技術に戸惑っていることが多く見受けられる。鈴木³⁾は、介護技術の実践過程について「一般的には最初は見よう見まねで『模倣』し、なんども『繰り返し』、そして『習熟』していく」としている。このプロセスに実習施設における学生の様子を置き換えてみると、まさに模倣し繰り返しているところであるといえる。習熟するためには何度も繰り返すことが必要であるが、そこまでには至っていない。学生の介護技術における不安や未熟さが評価に如実に現れている結果である。実習施設とは、学内の介護技術についての学習内容や、学生個々の学習内容の習得状況についての詳細な打ち合わせが必要である。養成校と実習施設が連携し、情報を共有することにより、一貫性のある指導が可能になると考える。介護技術における施設評価には、学生の介護技術の習得状況の他に、本学との連携状況の不十分さも反映されているのではないかと考える。

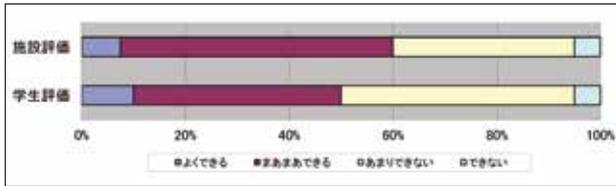


図2 介護技術

③記録と計画

記録と計画における評価を図3に示す。双方の「よくできる」、「まあまあできる」を合計した割合を比較すると、施設では77.5%であり、学生自己評価では70.0%である。学生自己評価の方が低くなっている。この大項目には、実習記録が書ける（実習の振り返りと気づきがある）、介護計画が立てられる、以上2つの項目が含まれている。実習巡回指導時の私的な印象として、実習日誌等の記録について苦手意識を持っている学生が多いように感じる。実習施設でのその日の実習日誌の記録時間は、夕方に大抵1時間、短いところでは30分と決められている。その中で今日一日の出来事を振り返り、日誌への記載内容や全体の構成を考え、自分の言葉として文章を記載する。学生から聞かれる「何を書いていいのかわからない」「時間が足りない」等の言葉の背景には、自分の考えをまとめる、それを読み手に理解してもらえるように書くという過程に苦慮している実情があると推察する。養成校の学習プログラムの中には学生の記録に関するスキル向上を目指すことに特化したカリキュラムは存在しないが、一朝一夕で習得できることではない。日頃の積み重ね以外に近道はないため、効果的なトレーニング方法について模索する必要もある。関川、峯尾⁴⁾は「出来事を記録するためには見る力、出来事を感じる力、相手の話を聞く力、感じたことを話す力、書く力、まとめる力などが必要である。これら五感を必要とする力は実習記録だけでなく、コミュニケーションにおける非言語の理解にも通じ、養成課程全体を通して学習することが求められる」としている。このことから記録に係わるスキルを向上させることは利用者の理解を図る上でも有益であることがわかる。

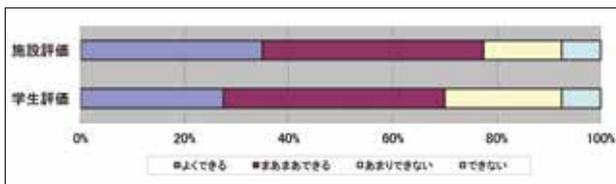


図3 記録と計画

④役割とチームケア

役割とチームケアにおける評価を図4に示す。双方の

「よくできる」、「まあまあできる」を合計した割合を比較すると、施設では72.5%であるのに対し、学生自己評価では80.0%というように施設評価よりも高い。この大項目には、介護職員の役割がわかる、自己の役割を自覚して他の職種と協働できる、以上2つの項目が含まれている。実習においては、実習生を担当する指導者がおり、日々の施設スケジュールに沿い実際の介護場面に応じて技術指導や利用者の理解に対する助言等を行っている。学生は指導者の仕事に取り組む姿勢、実際の介護場面を通して介護福祉士として必要な知識や技術等について理解を深めていく。また、多職種連携の機会にも触れ、チームケアを展開していく中での介護福祉士としての役割についても学習する。そのような機会を多く経験することができたことが、この評価に結びついていると考えられる。施設評価においては、利用者に関わる上で学生のコミュニケーション力の未熟さや、職員とのコミュニケーション不足の点についての指摘もあり、評価が学生よりも低い一因ともなっている。利用者の理解や多職種協働を図る上において、コミュニケーションはその基盤であり必要不可欠なことであるということを再認識しなければならない。

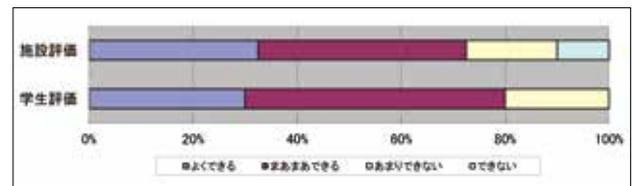


図4 役割とチームケア

⑤社会関係

社会関係における評価を図5に示す。この項目は施設、学生共にできると評価した割合が高い項目である。「よくできる」、「まあまあできる」を合計した割合を比較すると、施設評価、学生自己評価共に80.0%であった。この大項目には、施設と地域とのつながりがわかる、各種プログラムに参加できる、以上2つの項目が含まれている。実習においては、日々の介護業務の他に、利用者と地域住民との交流の機会等の場が設定されており、学生が参加することもある。そして、地域と施設との関係について理解を深め、地域社会の中における施設のあるべき姿について学ぶ。学生はそのような場を貴重な機会として捉え、学習意欲を持ち参加している姿勢が評価に結び付いていると推察される。また、施設においては、地域住民と施設利用者の交流の場に学生に参加してもらうことにより、学生に施設の役割について、多角的に理解してもらえるよう配慮がなされている。その成果が評価に結び付いているものと考えられる。

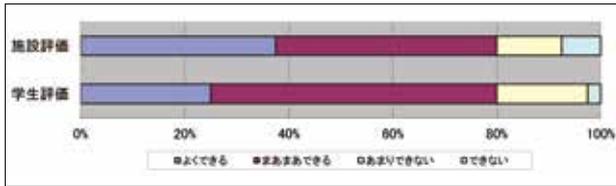


図5 社会関係

⑥態度

態度における評価を図6に示す。双方の「よくできる」、「まあまあできる」を合計した割合を比較すると、施設では77.5%であるのに対し、学生自己評価では87.5%というように施設評価よりも高い。この大項目には、礼儀ができてい、責任感がある、積極性、協調性がある以上3つの項目が含まれている。態度に含まれる項目は、介護専門職として、または一社会人として身につけていなければならない要素である。本学においても学習カリキュラム同様、各学生が在学中にしっかりと身につけることができるよう重きを置いている。一例としては、演習の授業の前には、本学の実習の手引き⁵⁾にある身だしなみについての項目を踏まえ、学生個々の整容チェックをし、普段からどのような整容が介護に携わる者としてふさわしいのか意識づけを行っている(ユニフォームに乱れはないか、髪の毛長い学生はまとめているか、髭は剃っているか、装飾品をつけていないか、爪は伸びていないか等)。その成果が学生自己評価に結び付いていると推察される。しかし、施設評価においては、学生の積極性、自発性のなさについての指摘もあり、評価が学生よりも低い一因ともなっている。普段は明朗快活な学生でも、実習の場になると緊張感からか、その学生らしさが発揮できないまま実習が終盤を迎えることもあるため、出来るだけ早い時期に実習施設に馴染むことができるように支援していく必要がある。吉田ら⁶⁾は訪問介護実習終了後における施設評価と学生自己評価の比較の中で「挨拶、対応が適切である」という項目について、あまりできないとの評価が施設評価よりも学生評価の方が高い要因として「学生は、挨拶はできるが、利用者に対しての適切な対応ができていないとの判断による結果と思われる。在宅での利用者の生活状況の中で瞬時に利用者に対しての適切な対応は、困難であったと思われる。学生の記述には『声かけをすることができず戸惑った』という内容が多く見られた」と述べている。今回の筆者らの調査は施設実習に限定しているが、同様の事は施設実習の場面においても起こりうる事が予測される。利用者への対応について、瞬時に適切な対応ができず戸惑っているような状況であれば、積極性や自発性が不足しているとみなされるかもしれない。その場合は適切な対応ができずとも、後日その場面についてプロセス

レコード等を活用し、学生に自己の言動を振り返ってもらい自らの経験を再構築するための意義ある機会になると考える。

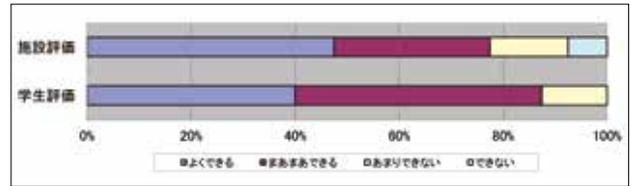


図6 態度

3. 現行の実習評価の見直しへ向けて

学生自己評価表に自由記載欄として、実習評価についての要望の欄も設けた。そこには「ABC評価だけでなくコメントも書いてほしい」、「(評価には指導者の)主観が入りすぎているような気がする」、「評価基準が指導者、施設によって違いが大きい」、「大学からの評価に関する統一見解は出ているのか」等の意見が寄せられた。指導者からは筆者が口頭で伺ったことだが「評価を付ける際の基準は何か示されているのか」、「他の施設では評価をつける際にどのようにしているのか」等の意見があった。本学における実習評価は、各項目においてABCDのいずれかを評価として判断するが、その基準が明文化されていない。それ故学生や指導者の意見があるように各項目の評価について、その拠り所がどこにあるのか、拠り所をどこにするのか疑問が生じるのも最もなことである。また、黒澤⁷⁾は、実習における評価について「実習における多元的な場面における認知、情意、行動等における介護技術の習得は、実習生の人間的な成長・発達を背景にもつものであり、経験を内省しながら一步一步進んでいく時間軸にそった変化の姿を評価するのである。したがって実習生がどう感じ取り、それに対してどう取り組もうとしているかが評価の対象となる」としている。そして評価方法として、実習担当教員や指導者との対話の重要性について言及している。本学においては、実習評価は実習終了後に指導者から提出される施設評価表を学生が後で確認するのみであり、そこに指導者と学生の対話の機会は存在しない。また、自己評価についても、それを具体的にどのように学習に反映させるのか具体的な方針は示されていない。実習評価は施設評価、学生自己評価が独立して存在したり、一方的なものではなく、互いの実習評価という媒体を通して指導者、学生、実習担当教員が共に実習期間を振り返り、対話し相互理解を深めるためのツールとして活用すべきものであると考える。以上のことから、現行の実習評価の見直しへ向けては、本学における実習評価の評価基準の策定と、指導者と学生が相互理解を深めることができる

ような評価方法の検討、そのための資料として活用できる実習評価表の開発の必要性等、現行の実習評価見直しへ向けての示唆を得ることができた。

IV. 結論

- 1 評価に関わる6項目における全体の評価の平均は、施設評価が75.275に対して、学生自己評価が74.373と低く評価していた。
- 2 施設評価と学生自己評価双方において「できる」、「まあまあできる」を合計した割合が80%以上の評価が得られたものとしては①利用者の理解（施設評価82.5%、学生自己評価87.5%）、⑤社会関係（施設評価、学生自己評価共に80.0%）の2項目であった。また、双方において「できる」、「まあまあできる」を合計した割合が最も少なかった項目は介護技術（施設評価60.0%、学生自己評価50.0%）に関することであった。
- 3 指導者、学生からの意見等も踏まえ、本学における実習評価の評価基準の策定と、指導者と学生が相互理解を深めることができるような評価方法の検討、そのための資料として活用できる実習評価表の開発の必要性等、現行の実習評価見直しへ向けての示唆を得ることができた。

V. 本研究の限界と課題

本研究の限界は、調査対象者の数が限られていることである。更に調査対象者の拡大等を通して、本研究の結果を検証していく必要がある。今後の課題としては、現行の実習評価の見直しと改善に向けて検討を重ねることである。

謝辞

本研究を行うに当たり、ご協力いただきました指導者及び施設関係者の皆様、学生各位に心より感謝申し上げます。

(受理日 平成26年10月31日)

引用文献

- 1) 社団法人日本介護福祉士養成施設協会：介護福祉士養成新カリキュラム、p38、2008.
- 2) 小櫃芳江：介護福祉士養成テキスト13 介護総合演習、建帛社、p137、2009.
- 3) 鈴木聖子：リーディングス介護福祉学18 介護技術、建帛社、p91、2004.
- 4) 関川幸子、峯尾武巳：介護福祉士養成テキスト13 介護総合演習、建帛社、p93、2009.
- 5) 弘前医療福祉大学短期大学部：介護実習の手引き(平成25年4月改訂)、p9、10、2013.
- 6) 吉田紀子、石黒康子、井上絵里：訪問介護実習に向けての効果的教育指導のあり方－実習評価を通しての学び－、富山短期大学紀要第42巻、p193、2007.
- 7) 黒澤貞夫：リーディングス介護福祉学18 介護技術、建帛社、p88、2004.

参考文献

- 山口かおる：指導者の評価と学生自己評価の比較、秋田桂城短期大学紀要第18号、2005.
- 山口かおる：介護実習における不可欠項目の検討、秋田桂城短期大学紀要第15号、2003.
- 金松敏信：介護福祉実習に関する学生アンケートに見る実習の現状と課題、長崎女子短期大学紀要第37号、2013.
- 由田美津子、吉藤郁：実習評価からみる人間福祉学科介護実習の実態について－施設評価と自己評価を通して考える－、北陸学院短期大学紀要第35号、2003.
- 林信治：介護実習の評価について考える－介護実習評価表の改訂を通して－、東海学院大学 紀要第1号、2007.

Characteristics and issues facing evaluation of caregiver training at this university – comparison of training establishment evaluation and student self-evaluation –

Yuko Kudo¹⁾ Kaoru Yamaguchi¹⁾

1) Hirosaki University of Health and Welfare Junior College

Abstract

In our study, we used training evaluation lists currently utilized by Hirosaki University of Health and Welfare Junior College, School of Health Sciences, Department of Health Welfare to compare training establishment evaluations and student self-evaluations. The purpose of our study was to clarify characteristics of each evaluation criteria and to review and summarize suggestions concerning the current system of training evaluation. Our results showed the total average evaluation rating for 6 criteria items to be lower for the student self-evaluation rating (74.373) than for the training establishment evaluation rating (75.275). In addition, both subjects gave high ratings for the criteria pertaining to “user comprehension” and “social relations”. The lowest evaluations were for items concerning “caregiving techniques”. Based on comments written in the free description field by students and training establishment mentors, we aimed to establish training evaluation guidelines at our university and consider an evaluation method which would strengthen the mutual understanding between mentors and students. The development of effective training evaluation lists and the obtaining of suggestions for revision of the current evaluation system are important materials for improvement.

key words: caregiver training, training establishment evaluation, student self-evaluation